

「帝国」史としての日本研究——日文研プロジェクトの試み

劉 建 輝

モダニティとナショナリティからの脱却を指標とする「開かれた歴史」が唱えられて久しい。中でも、具体的にトランスナショナル・ヒストリーの構築を主張する声が近年、学会等で特によく聞こえる。しかし、実践上の困難が相当大きいのだろうか、いわゆる歴史学の「現場」を覗いてみると、なかなかその成果を見付けることが難しい。その意味で、きわめて魅力的で有意義な挑戦であるが、やや「理論」が先行していることも否めない。

このような事態をそれぞれの研究者がどこまで意識しているかはわからないが、確実に言えるのは、ここ数年、日文研では、そうした歴史の脱構築を目指す共同研究会やプロジェクト、国際シンポジウムが実に数多く主催、または開催されたということである。そしてそれらはあたかも主宰者同士が事前に相談し合ったかのように、いずれも「帝国」という枠組みを設定し、それぞれの分野において果敢にこの課題に挑戦している。

なぜ「帝国」なのだろうか。むろん、それは各企画者や参加者の長年にわたる学問的営為が来すべくして来した当然の内的帰趨に違いない。そのため、私は彼らの主催、または開催の意図をかってに代弁することはできないし、その資格もない。とすれば、手前味噌ではなはだ恐縮だが、ここで、私自身がいかなる思惑でこれらの研究会やプロジェクトに関わり、そこできかなる問題の解決を目指したかを説明し、いささかでも昨今の日文研のこうした研究動向を紹介

介してみたい。

周知の通り、近代日本は、世界的に西洋に遅れた後発的国民国家として、また東アジア域内に周囲に先んじて西洋文明を実践した近代国家として、当初から国民国家的構築と近代帝國的構築を同時進行的に進めざるを得ない運命にあった。そのため、あらゆる後進的帝国と同様、一見相反する力学が終始互換的に働き、まさに両者が合わせてその近代的成立を支えてきた。その意味で、近代日本は「脱亜」したどころか、むしろ周縁との関係においてこそ存在し続けることができたのである（むろん、前近代においてもそれはつねに東アジア域内の秩序と接続していたし、また近代以降においてはそのままグローバルな資本主義「世界システム」に統合されていたが、その両者との関係については、ここではあえて割愛させて頂く）。しかし、従来の歴史学では、あたかも一つの前提のように、その出発点から「近代」ないしは「国家」を自らの思惟する枠組み、または物差しとしていたため、こうした周縁との互換かつ横断的な関連が必然的に後景化してしまい、たとえそれを議論の俎上に載せても、結局は植民地への工業化等の遂行を強調する近代化論になるか、さもなければそれへの経済的搾取を強調する収奪論になるという、いずれも一方通行的なものに収斂されてしまう。

このような状況を打破するために、むろん、前近代的秩序、またその後の資本主義的「世界システム」との関連を含め、さまざまな認識論上の再布置が必要だろう。そして東アジア域内のこの数百年の歴史（中華秩序の崩壊と近代日本の勃興）を踏まえれば、やはりまず「帝国」という「単位」を立ち上げ、その枠組みの中に日本およびその周縁を解き放つべきだろう。どこまで共有してもらえないかわからないが、それが一国史観的な近代日本研究を止揚し、あらためて世界的にその存在を位置付ける最初の一步だと、私は信じている。

さて、日文研で展開されてきたこの「帝国」史、ないしは「帝国」論の構築は一体どのようなものがあるのだろうか。たとえば、直近の共同研究だけを見ても、「東アジアにおける知的システムの近代的再編成」（鈴木貞美教授主宰）「東アジア近現代における知的交流―概念編成を中心に」（右に同じ）「植民地帝国日本における支配と地域社会」（松田利彦教授主宰）「植民地帝国日本における知と権力」（右に同じ）「新大陸の日系移民の歴史と文化」（細川周平教授主宰）「帝国と高等教育―東アジアの文脈」（酒井哲哉客員教授主宰）などが挙げられ、他にも関連するプロジェクトや国際会議等が多数存在している。ここでそれを逐一紹介する余裕はないが、私自身が関わったものをいくつか並べてその一端を提示しよう。

一つ目は、東アジア域内における近代概念ないしは言説の成立と流布をめぐる探求である。これは、おもに退職された鈴木貞美氏を中心に展開されたものだが、十数年にわたり、共同研究、国際研究集会、また科学研究費プロジェクト等を通して、まさに大々的に進められていた。その成果として、近代諸概念、またそれによって生産された近代諸言説（文学、芸術等）がいかに帝国日本を中心に生成し、またその周縁との往還運動の中で補強されながら、一つの権力体系を形成していったかが明確に浮かび上がってきた。つまり、まだすべてについて解明されたわけではないが、個々の概念や言説が伝統的な意味合いを背負いながらもいかに近代的に再編され、そしてそれがどのような形で東アジア域内で流布、浸透していたかという全体的な把握がようやく可能となったのである。

二つ目は、日本帝国の植民地、占領地、中でもとりわけ旧「満洲」についての考察である。これは、ここ十数年、私が共同研究「近代中国東北部（旧満洲）文化に関する総合研究」「『満洲』学の整理と再編」等を通して進めてきた課題である。その狙いは、先ほども触れた従来の

「近代化論」「収奪論」という、いわば二項対立的な認識布置から脱却し、できるだけ帝国日本と植民地「満洲」を一つの共時的、横断的な連関構造の中に還元させ、そしてその背後にある「近代」そのものの両義性を解明しようとするものである。むろん、この目的はかならずしも達成したわけではないので、今後も引き続き模索する予定である。

そして三つ目は、近現代日本人海外移民に関する研究である。これは、人間文化研究機構「日本関連在外資料の調査研究」プロジェクトB「近現代における日本人移民とその環境に関する在外資料の調査と研究」というものだが、前責任者鈴木貞美氏の退職に伴い、今、私がまとめ役を務めている研究テーマである。帝国の一要素を構成する海外移民について、従来も多くの研究が存在するが、ここで特に解明しようとしているのは、やはり現地、つまり移植民地社会との関係である。帝国の体現者でありながら、同時に「余計」者でもある移民たちが現地でいかなる活動を展開していたかを考察することによって、本国日本と移植民地との関連性を構造的に浮き彫りにすることができると考えている。

四つ目は、東アジア域内におけるツーリズムの問題である。海外移民と同様、帝国圏内の旅行もその成立と存続を支えるものとして数えられる。日文研では、白幡洋三郎氏を中心に、長年にわたって国内外のツーリズム関連の第一次資料を収集してきた。中には、いわゆる「外地」の風景等を内容とする絵葉書や帝国圏内各地の旅行案内、各植民地、占領地の地図が数多く含まれている。これらは現地状況や人的移動など多方面の情報源として植民地、占領地、さらに帝国そのものの認識に大きく貢献できるだけでなく、一表象体として、そこに無限の文化的分析材料が凝縮されている。今年度からすでにプロジェクトを立ち上げており、今後内外の研究者と協力しながら鋭意、整理・分析作業を進めて行きたいと思っている。

以上、きわめて概略的だが、いわゆる「帝国」史の構築と関連し、かつ私が関わっている日
文研内の諸研究課題について紹介した。言うまでもなく、これらはけっして一人や二人で実現
できるものではなく、かならず多くの研究者と一緒に挑戦しなければならない大掛かりなデー
マである。そして冒頭に申し上げた大言壮語とは裏腹に、そのいずれもまだすべて道半ばで、
今後こそまさに正念場を迎えるところである。本特集の意図する？「日本」研究の真の脱構築
はまだまだこれからだと言わざるを得ない。

(国際日本文化研究センター教授)

広く長く、そして深く——外国人研究者とつきあう法

鈴木 貞 美

三月末に定年退職して三か月経つ。二五年間、なんと慌ただしい日々を送ってきたことか、
と我ながら呆れはてている。もちろん、そうでなければ、得られなかったことばかりなので、
悔やんでいるわけではない。著作の不足や不備は補いをつけながら、せいぜい、仕上げを楽し
んでゆきたい。

本誌の編集長が、海外の研究者とのつきあい方のノウ・ハウを書き遺せという。影の聲は、
こうささやいている。鈴木はろくに語学もできないのに、どうして年に五回も六回も海外のシ